

深みに網を降ろす

入 治 彦

奨励者紹介〔いり・はるひこ〕

日本キリスト教団京都教会牧師

京都刑務所教誨師

イエスがゲネサレト湖畔に立っておられると、神の言葉を聞こうとして、群衆がその周りに押し寄せて来た。イエスは、二そうの舟が岸にあるのを御覧になった。漁師たちは、舟から上がって網を洗っていた。そこでイエスは、そのうちの一そうであるシモンの持ち舟に乗り、岸から少し漕ぎ出すようにお頼みになった。そして、腰を下ろして舟から群衆に教え始められた。話し終わったとき、シモンに、「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をしなさい」と言われた。シモンは、「先生、わたしたちは、夜通し苦勞しましたが、何もとれませんでしたが、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう」と答えた。そして、漁師たちがそのとおりにすると、おびただしい魚がかかり、網が破れそうになった。そこで、もう一そうの舟にいる仲間に合図して、来て手を貸してくれるように頼んだ。彼らは来て、二そうの舟を魚でいっぱいにしたので、舟は沈みそうになった。これを見たシモン・ペトロは、イエスの足もとにひれ伏して、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」と言った。とれた魚にシモンも一緒にいた者も皆驚いたからである。シモンの仲間、ゼベダイの子のヤコブもヨハネも同様だった。すると、イエスはシモンに言われた。「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」そこで、彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った。

(ルカによる福音書 5章1—11節)

琵琶湖と琴湖

今礼拝が行われているこのクラーク記念館は、同志社大学のシンボリックな建物としてよく知られているものです。また、こちらの道を隔てた所にあります、アーモスト館も綺麗な建物ですね。こちらは同志社のカレッジソング作詞者のウィリアム・メレル・ヴォーリズさんの設計によるものです。滋賀県草津市には、琵琶湖博物館がありますが、そこに行きますと、琵琶の形をした琵琶湖の図と竖琴の形をしたイスラエルのガリラヤ湖の図が対比的に並べて説明されています。なぜまた一般の方々に紹介するのに、わざわざイスラエルのガリラヤ湖を登場させているのかと考えさせられましたが、そこにはアーモスト館だけでなく関西学院、神戸女学院、琵琶湖畔の多くのキリスト教会がヴォーリズ建築であったり、信徒伝道者としてメンタームといった近江兄弟社や学校、病院を作っていたヴォーリズさんの多大な貢献があったからだろうと想像してしまいました。

百円の新約聖書

私が小学生の頃に初めて買った百円の小さな新約聖書は、同志社とも関係の深い神戸教会、その教会員だった小磯良平さんの描いた「網が破れそうになった」という題の絵が使われていました。ガリラヤ

湖で、櫂をもつイエスが小舟の右側におられ、やがては弟子となる3人が大漁の魚を引き上げている印象に残る場面でした。そこには、弟子たちがイエスによって、魚をすなだる者から人をすなだる者へと変えられていった時の風景が描かれていました。ではその琵琶湖ならぬガリラヤ湖でとれたこれらの魚は何かと問われた方がありましたが、どうもそれは、ティラピア、別名ピーターズ・フィッシュ、ペテロの魚、スズメダイの一種の魚や、イワシがとれたようです。

徒労の風景

先程読んでいただいた所の最初には、こう記されています。「イエスがゲネサレト湖畔に立っておられると、神の言葉を聞こうとして、群衆がその周りに押し寄せて来た。イエスは、二艘の舟が岸にあるのを御覧になった。漁師たちは、舟から上がって網を洗っていた」と。朝の光に輝くガリラヤ湖畔、ガリラヤ湖はその場所の名前をとってゲネサレト湖、先程の琴湖、キンネレト湖といった別名があります。そこには2艘の小舟が寄せられていて、漁師たちが網を洗っていました。それを見つめるイエスの姿。人々が大きな期待をもってイエスの周りに群がっています。その喧噪とは裏腹に、漁師たちの表情は重く沈んでいました。網にまとわりついた藻や木切れをくまなく引き剥がしながら、網を洗っています。網に魚の油がつき、乾燥してもろくなるのを防ぐためにも網を洗っていたということです。この漁師たちは、夜通し働きながら、何もとれなかった人たちでした。あらゆる手だてを講じながら、すべてが徒労に終わってしまったという、ため息しか聞こえてこないような光景に他なりません。

網を洗う漁師たち

夜通しの漁も空しく網を洗う漁師たちの姿は、今日を生きる私たちの現実かもしれません。世の中一生涯懸命にやれば道は開けるなどということは、気力も体力も充実している時には、そのようなことが言えるでしょう。けれども、現実には徒労に終わるかのように見えることの連続です。イエスが「ガリラヤ湖の岸辺に寄せられていた舟を御覧になった。漁師たちは舟から上がって網を洗っていた」とは、まさしくそんな漁師たちの現実をイエスが見据えていたということでありましょう。

沖に漕ぎ出し網を降ろしなさい

イエスは、そういう破れの中にいた漁師たちに向かって、語りかけられたのであります。シモンの舟に乗られたイエスは、彼に向かって言われました。

「沖に漕ぎ出して、網を降ろし、漁をしなさい」と。沖に漕ぎ出し……網を降ろし……漁をしなさい」と。サラッと読めば、何の変哲もない、何の引っ掛かりもない情景のようにも思えます。しかし、ここから、実に常識を逸した事柄が伺えるのです。

素人からの指示

一つは、これを命じているのが、魚をとるということに関しては、ずぶの^{しろうと}素人と言ってもよいイエスだということです。イエスは、家を建てるということについて言えば、大工ヨセフの息子さんでしたから、それは

おそらく玄人はだしかったでしょう。けれども、魚をとることについては、ほとんど知識がなかったのではないのでしょうか。ですから漁師たちにすれば、素人から漁に関して指示されるのは心外だったことでしょう。

朝の漁

また二つ目には、彼らの漁は夜行うのが常でした。夜漁り火を焚いて、その炎の灯りの下に魚を集めて漁をするのです。夜の暗い闇の中で水に映る炎の灯りに「飛んで火に入る夏の虫」さながら魚が集まって来る。それを一網打尽にするのが、この地方のやり方でした。ところが、イエスという方は、陽が昇り、朝となり、あたりが全く明るくなった時間に網を降ろしなさいというではありませんか。それも、もう漁を終わり、やっと網を洗い終わった漁師たちにその網をもう一度降ろしなさいというのであります。

沖での漁

三つ目は、「沖に漕ぎ出しなさい」の沖ということが問題になってきます。私たちがふだん使っている新共同訳、聖書協会訳、口語訳も「沖」でしたが、文語訳では「深み」と訳されていました。実は、漁師たちが使っていた網というのは、投げ網という網でこれは通常浅瀬で網を打って、水平に横に投げて使うものと相場が決まっていた。岸から程近いところで使うものでしたから、沖まで出て行っても、それこそ深い所まで届かない代物でした。それでも、イエスは浅瀬で網を投げていないで、もっとはるか遠方を見据えて、それももっと沖の深い所に投げ網を降ろしてみなさい、と言われたのです。

常識を逸した漁

この三つの問題は、プロの漁師からすれば、全く常識を逸したことだったのです。ですから、漁師シモンの「先生、わたしたちは、夜通し苦勞しましたが、何もとれませんでした」という発言は、もっともなことでした。「自分たちは、夜を徹して浅瀬で仕事をしてきた。あらゆる知識と経験をこらして徹夜で働いてきた、その結果がこのような形であらわれたのだから、仕方がない。今さら何をアドバイスとして聞くことができます。それも定石を踏み外した命令にだれが耳を貸すだろうか？」ふつうならば、こう答えるに決まっています。ところが、シモンは「わたしたちは、夜通し苦勞しましたが、何もとれませんでした」という現実を示しつつも、「しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましょう」と答えたではありませんか。これは、これまでの人間的な知識、経験を超えて働くものです。

深みでの漁

ここで改めて「沖」のことを考えてみたいと思います。沖、沖合いとは原語、ギリシャ語では「バートス」といいます。これは、先程も触れた通り、「深み」という意味でもあります。ローマの信徒への手紙 11 章 33 節では「ああ、神の富と知識のなんと深いことか。だれが、神の定めを究め尽くし、神の道を理解し尽くせよう」というふうな、汲み尽くせない充満、神の恵みの豊かさの意味さえそこに隠されています。また、コリントの信徒への手紙 2 章 10 節は「霊は一切のことを、神の深みさえも究めます」というように、十字架に隠された神の奥義をあらわす言葉として登場しています。沖を深みととらえる時、そこには「水平」ではなく上から「垂直」に切り込んでくる神の極め尽くせない豊かさ、神の深淵があるのです。

三笥の1ミリ

この半年間に「〇〇の1ミリ」といった言葉が話題になりました。

昨年のサッカーW杯では、日本対スペイン戦の「三笥の1ミリ」であったり、WBCでは「源田の1ミリ」など。三笥薫選手のゴール際のラインを越えたと思われたところから上げたクロスを田中碧選手が入れたゴールは本当に面白いゴールでした。本人たちはラインの外に出してしまったか、内側だったか半信半疑だったようですが、日本側の観客は「ゴールだゴールだ」と叫び、審判も決めかねる様子でした。そこで、VAR、ビデオ・アシスタント・レフェリーを使おうと審判が四角を手で示すと、そのビデオ判定となりました。すると、ボールは外に出たようでも、1ミリだけラインに乗っていたということになり、ゴールと認定されました。人間が人の目で横から水平に見ていた時、それはもうラインの外だったものが、VARの機械が上から垂直に写した時、ちゃんとラインの上に1ミリだけかかっていた。ボールにチップが入っていてかなり正確な結果が出たとのことでした。

水平ではなく垂直

浅瀬で「水平」に投げる投げ網を使っていた時、魚を獲れなかった者が、沖に出て上から下に「垂直」に降ろすように使ったところ、大漁だったという不思議。人間の目から見たらダメでも、VARではありませんが、神の視点から見たら捨てたものじゃない。それも深みに網を降ろした時の恵みの豊かさ。

この世にはさまざまな苦難があり、天変地異があり、神がいるのならどうしてこんな悲惨なむごいことが起こるのか、と叫びたくなることもあろうかと思います。そのような問いに対して、答えることはとてもむずかしいことだと思いますが、ある年輩の牧師は言いました。もし敢えて言えるとしたら、「それは人間が深くされるためなのだ」と。その時ふと、ある精神科医が言っていた「ダイヤモンドは88面体にカットされてはじめて本当の輝きを放つ」といった言葉を思い出しました。砕かれて刻まれてカットされ、カットされて、88面になって初めて本当に輝くという不思議。

思いにまさる豊漁

さて、漁師たちが「しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう」と答えてその通り深みに網を降ろしたところ、おびただしい数の魚がかかり、網が破れそうになったというではありませんか。彼らはもう1その舟にも合図をして「加勢^{かせい}」に来てもらうように頼みました。2その舟は魚でいっぱいになり、沈みそうになったといいます。思いにまさる恵みを与えてくださったのです。

人間を捕える漁師へ

ここにまた注目すべきことが起こりました。この大漁を見たペトロは、イエスの足下にひれ伏して「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」と言っています。豊かな収穫に我を忘れて有頂天になり舞い上がるのではなく、彼は半信半疑であり、たかをくくっていた自分を恥じ、自らの不信の、罪深さをはっきりと示されたのです。大きな恵みのうちに目から鱗、自らの小ささに目を開かれたのです。イエスは、恐れの中にいるシモンに言われました。「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師

になる」と。神の深みに出会った者は、徒勞の連続ともいえる現実に今度は沖から陸へと向かい、魚とりから人間を捕える漁師へと、召し出したのです。

厳しい現実の中に響く上からの垂直の言葉

かえりみて私たちの現実にも空しいものが見つまといます。強い者はますます強く、弱い者はますます弱くなる勝ち組、負け組、富める者はますます富み、貧しい者はますます貧しくなる格差社会にあって、頑張れば必ず成功する、一生懸命やれば必ず成功するとは言い難いものもあります。現実には夜通し働いたからといって、報われないこともあるでしょう。右肩上がりの時代だったら簡単にそう言っても、今のような右肩下がりの時代はそんなにうまくいくことはないというのが現実かもしれません。

けれどもそういう現実の中に、神からの上からの垂直のこの言葉が響いてきます。そして『しかし、お言葉ですから』と網を降ろすこと。私たちの生活はそれの繰り返しではないでしょうか。その瞬間、瞬間は小さな点でしかありません。けれども、それは振り返ってみれば、神の大きな足跡の集積、一本通った長い真理の道となるのです。過ぎ去り行く水平的な現実の中に、沖の深みに網を垂直に降ろすこと。沖は荒海かも知れません。けれども、そこで私たちは浅瀬では得ることのできない、尽きることのない神の恵みの深さを知ることができるのであります。

日本のへそ、世界の中心

最初に触れましたヴォーリズさんは、日本に信徒伝道者として来日し、商業高校の英語の先生をしながら伝道を試みていたようですが、最初はうまくいかず、ホームシックにもなり、どうしてこんなさいはての地にまで来てしまったのかと落ち込み、深く悩んでいたそうです。それが聖書を読み毎日祈っているうちに、琵琶湖は日本のへそ、世界の中心だと思ふようになり、ここを拠点にして伝道をしていこうと腹を括ったと言います。それからというものの琵琶湖畔の町々、琵琶湖にガリラヤ丸なる船も浮かべて、日本の文化のためにも多大な貢献をされました。

しかし、お言葉ですから

キリスト者で経済学者だった隅谷三喜男さんは、言っていました。「イエスに留まるということは、この世という横軸に据えられた縦軸—垂直軸にたとえることができる。横軸—水平軸だけでは絶えずその時その時の時代の流れに押し流されて、真にいのちある何かを産み出すことはできない。昨日は軍国主義、今日は民主主義、明日は経済第一主義ということになっていないだろうか」（『日本プロテスタント史論』『隅谷三喜男著作集』8 岩波書店 2003年）と。わたしたちもまた、「しかし、お言葉ですから」と言って、沖に、深みに網を降ろす愚かなわざに賭けていきたいものです。

2023年5月10日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録